使われる公共空間とは　－ 理論に基づいたアーバンデザイン －

髙松 誠治　（スペースシンタックス・ジャパン株式会社）

概要：　都市空間には、自然に人を引き寄せるような場所がある一方、逆に人を遠ざけるような場所も存在します。どのようにすれば、地域社会により良く使われる公共空間をつくることができるのでしょうか？ヨーロッパで議論されている最新のアーバンデザインの考え方について、英国でのプロジェクト事例を交えながらご紹介したいと思います。

「人は見ることによって経路を認識する」、「広場は多くの人の自然な動線上から認識されなければ機能しない」という、考えてみればあたりまえのことを、すっかり忘れていたような公共空間デザインが存在する。相当の資金を投じて「賑わいの」広場を整備しても、全く思うように機能しないというケースだ。このような失敗は、豊かな広場文化を持つとされるヨーロッパの街にさえ見受けられる。

空間の「繋がり方」、つまり、視覚的な関係、物理的なアクセスのデザインは、機能する空間をつくる上で最重要な要素であるといえる。まず公共空間として認識され、自然に人が集まらなければ、いかに快適で美しい広場を設けても、人々の交流や社会性は生まれないからである。さらに、公共空間の機能性は、地域の小売業の盛衰から治安の良否まで、幅広い社会問題と関係する。

現在、英国では、都市計画システムの枠組の更新作業が進行中である。その根幹である、PPS1（Planning Policy Statement 1）は、従来の土地利用計画(Land Use Planning)だけではない、空間計画(Spatial Planning）の重要性と、それを実践するための高度なアーバンデザインの必要性を指摘している。つまり、どのような場所をつくり、その場所がどのように機能するかを具体的な空間デザイン戦略と結びつけて考えるべきであるということである。

また、このための現況の把握や戦略的なビジョンの検討に、より客観的なアプローチが求められている。つまり、公共空間デザインのプロジェクトでは、複数の専門家のチームで取り組まれることから、チーム内の共通理解を深めることが重要であり、またデザインの良否を（ビジョンと照らし合わせながら）評価することや、地域住民など関係者に明快かつ的確にプレゼンテーションすることなど、デザインを客観的に語る必要性は、極めて大きい。

このような中、ロンドン市長のケン・リビングストンは、いち早く、「世界で一番 Walkable な（歩きやすい、歩きたくさせる）街をつくる」ことを宣言し、多くの興味深い公共空間のリデザイン・プロジェクトを推進している。

この政策の最も旗艦的なプロジェクトとして、"World Square for All" というプロジェクトがある。これは、ロンドン中心部にある、トラファルガー広場、パーラメント広場の２つの広場とその間を結ぶホワイトホールという街路について、ロンドンが誇れる公共空間としてリデザインしようとするものである。特に、トラファルガー広場は、絵葉書やガイドブックに登場する観光名所であるものの、市民にはほとんど使われない広場として悪評高いものであった。また、歴史文化財でもあることから、改変には慎重な意見もあり、そのデザイン的解決が注目を集めた。

フォスター・アンド・パートナーズが、全体のデザイン・コーディネートを担当し、交通、ランドスケープなどの専門コンサルタントによりチームが組まれた。その中で、スペースシンタックス社は、歩行者の動線・行動や、空間レイアウトの分析を担当し、「多くの人が広場を近道として使えるよう、広場北面に幅の広い大階段を設けること」や、「南側の交通島（周囲への視界が開け、経路選択に適する場）へできるだけダイレクトにアクセスできるデザイン」などを提案した。

2003年7月に、オープンした新生トラファルガー広場は、季節や時間帯を問わず、多くの、様々な属性の人々に使われている。このことは、継続的に行われた事後評価結果を見ても明らかであり、本来あるべき「街の中心の広場」の姿として、好評を得ている。

公共空間の使い方や位置づけにおいて、英国と日本の文化的な違いは多少はあるかもしれませんが、それよりも、普遍的、共通的な部分の中に、重要な点、学ぶ点は多くあると思われます。日本が世界に誇れるような公共空間デザインの推進に向けて、微力ながら努力していきたいと考えています。

トラファルガー広場（ロンドン）：従前の歩行者行動調査結果。広場としての課題・問題点を浮き彫りにすることにより、デザインの方向性の議論を論理的に進める。

（同左）：竣工後の様子。観光客だけれはなく、あらゆる属性のロンドン市民が行き来し、立ち止まり、同じ空間で時間を過ごす。